

#### IV ま と め

左京二条二坊十三坪遺跡は十三坪の南半部分を約3分の1発掘したわけであるが、各発掘区は相互に距離をもって離れているため、坪内の宅地割の変遷を复原することには一定の限界がある。しかし出土遺物からみて、遺構は8世紀前半に始まり10世紀の末に至るほぼ300年間にわたって建物の建て替えが行なわれたことは明らかであり、9・10世紀の建物の変遷が平城京内で始めて復原できる点で貴重な遺跡と言わねばならない。

以下では大きく6期の時期に分け、十三坪南半部分の宅地割の変遷をみることにする。

**A期** 建物2棟(SB2700、SB2650)、溝4条(SD2282、SD2370、SD2740、SD2750)井戸1基(SE2371)があり、十三坪北半では塀1条(SA2273)、溝2条(SD2265、SD2266)がある。坪を画する十二・十三坪境小路(SF2760)及び十三坪を南北に2分する溝(SD22

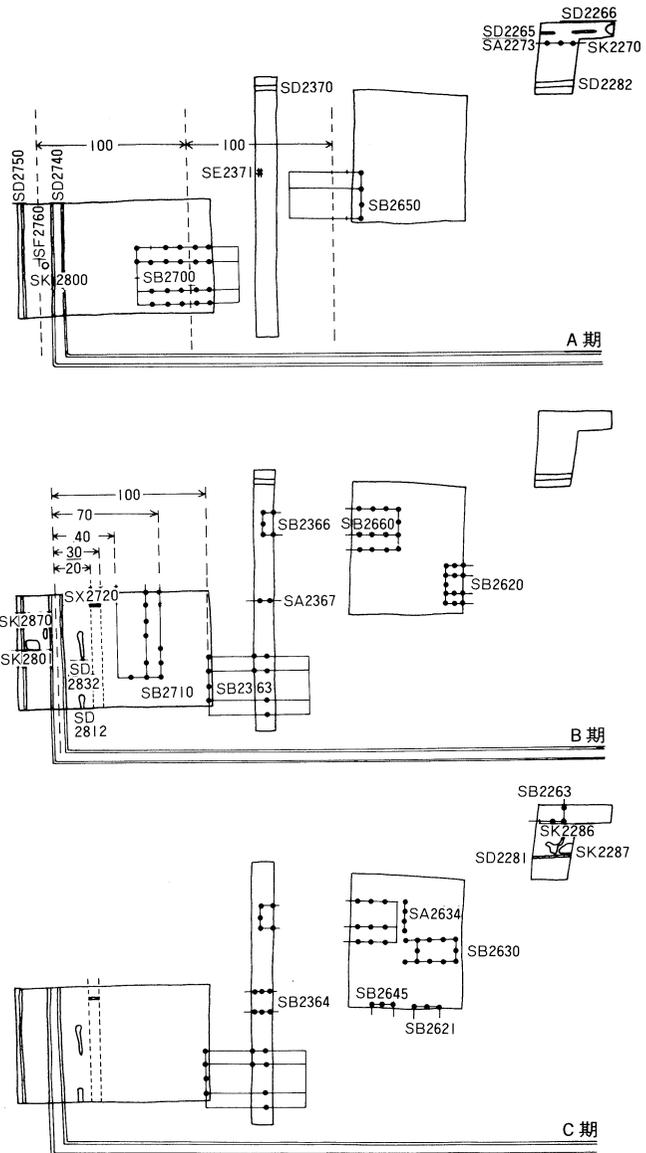


fig. 23 十三坪建物配置変遷図(1)

82、SD2370)はこの期に形成される。主屋は南北二面廂の東西棟建物SB2700で、副屋は北廂の東西棟建物SB2650である。SB2700を桁行7間、SB2650を桁行5間とすると、SB2700の東西心は十二・十三坪境小路心より東へ100尺、SB2650の東西心は東へ195尺の位置になる。坪の南は二条大路に面し、坪の東は東二坊大路に面する訳であるが、左京二条二坊十二坪遺跡では二条大路に面して築地が検出されており、当十三坪でも築地で

南限を画したことは間違いな  
いであろう。そして東二坊大  
路に面した東辺でも、築地で  
東限を画したと思われる。  
したがって坪内の出入口は十  
二・十三坪境小路に面した西  
辺と思われ、坪内の区画も坪  
境小路を基準にして、主屋を  
東へ100尺、副屋を東へ195  
尺の位置に配したものであろ  
う。

**B期** 建物5棟(S B 2363、S B  
2710、S B 2660、S B 2620、S  
B 2366)、塀1条(S A 2367)、  
溝6条(S D 2282、S D 2370、  
S D 2740、S D 2750、S D 2832、  
S D 2812)、木樋1条(S X 2720)  
がこの期に属する。A期の大  
型建物2棟を廃し、新たに主

屋S B 2363、副屋2710を建てる。この期の建物の割り付けは、十二・十三坪境小路東側溝  
心を基準にしたと思われる。即ち東側溝心より20尺-30尺の位置に木樋S X 2720を置き、  
40尺-70尺の位置に副屋S B 2710を建て、100尺-170尺の位置に主屋S B 2363を建てる。  
主屋S B 2363の北方40尺の位置に目隠塀S A 2367を作り、その後方及び東方に雑舎S B 23  
66、S B 2660、S B 2620を配す。なお、木樋S X 2720は副屋S B 2710からの排水用暗渠と  
思われるが、この位置に築地を想定することができよう。S D 2832・S D 2812は築地の西  
雨落溝の可能性がある。

**C期** B期の副屋S B 2710を廃し、S B 2790を建てる。主屋はB期からのS B 2363が存続  
していたのであろう。雑舎群には変化がある。即ちB期の柵S A 2367を廃し、同位置にS  
B 2364を建てる。東方の雑舎S B 2620を廃し、その北方に東西棟建物S B 2630と塀S A 26  
34を建てる。また、S B 2630の南方30尺の位置に2棟の南北棟建物S B 2645、S B 2621を  
建てる。一方、十三坪北半部ではS B 2263が建てられ、その南に溝1条(S D 2281)と土坂  
2基(S K 2286・S K 2287)が形成された。

以上A～C期を通じて十三坪は南北に2分して使用されており、十三坪南半部における  
各期の主屋・副屋は二条大路に近接して造営されている。

**D期** 坪内に大きな変化が生じた時期。十三坪を南北に区画することを止め、東二坊大路

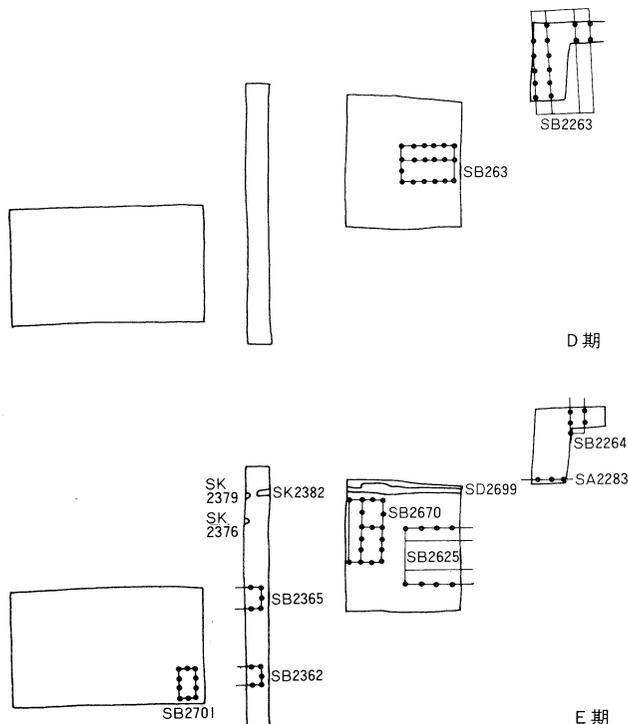


fig. 24 十三坪建物配置変遷図(2)

に面して主屋 S B 2263、その西方に副屋 S B 2631を建てた。坪の西半では、C期の建物はすべてなくなり、十二・十三坪境小路の側溝も埋められた。坪の東半に位置する二面廂付大型建物 S B 2263は新たに造営されたが、副屋である S B 2631はC期の建物 S B 2630を廃し、同位置に北廂を付して建て替えたものである。S B 2630から S B 2631への建て替えは継続性を示すが、大型建物 S B 2263の新たな出現は坪内に大きな変化が生じたことを示している。

**E期** 坪内は東西溝(S K 2382、S K 2379、S D 2699)と東西堀(S A 2283)とで南北に区画さ

れ、再び坪内を南北に2分して使用されはじめる。この時期には主屋 S B 2625と副屋 S B 2670が建てられる。主屋の西方では、南側柱筋に合わせて S B 2365を建て、その南方に S B 2362、その西方に S B 2701の雑舎群を配する。

**F期** 大型建物はまったくなくなり、小型の雑舎群が3時期建て替えられる。F<sub>2</sub>期では建物が北から東へ3°振れており、周辺の条坊遺跡が廃絶していることをうかがわせる。

**G期** 坪西半部分で多くの土壇が掘られ、奈良～平安時代の遺構が破壊された。

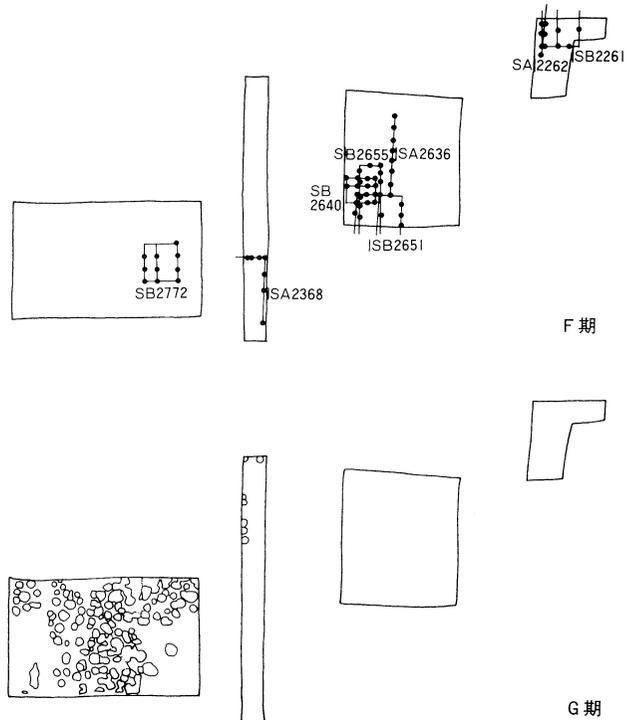


fig. 25 十三坪建物配置変遷図(3)

**実年代の比定** A期の遺構では、柱穴出土の良好な遺物はない。しかしB期の主屋 S B 2363の柱穴から平城II～III期の土器が出土しており、A期の主屋 S B 2700をB期の主屋 S B 2363へ建て替えたことは柱穴の切り合いから明らかである。この事実と、土壇 S K 2800、S K 2270から平城II期の土器が多量に出土していることから、A期を8世紀前半に置くことができる。B期では主屋 S B 2363の柱穴から平城II～III期の土器が出土している。B期を8世紀中葉に置くことができる。C期では S B 2263から平城V期の土器、土壇 S K 2286、S K 2287から長岡宮期の土器が出土している。C期を780年頃から長岡宮の年代に置くことができる。D期の遺構では副屋 S B 2630から平城VII期の土器が出土している。また主屋 S B 2263はC期の建物 S B 2263を廃して建てられたことは明らかであり、S B 2263から平

城Ⅴ期の土器が出土しているから、S B 2263はそれ以降となる。D期は9世紀前半代であろう。E期では、S B 2670、S K 2690、S D 2699、S K 2382、S K 2379、S K 2376から平城京東三坊大路東側溝S D 650 A出土土器併行の土器が出土しており、9世紀中葉から後半代に年代を置くことができる。F期では、F<sub>3</sub>期に属するS B 2640から、東三坊大路東側溝S D 650 B出土土器よりは新しい型式で、薬師寺西僧房床面出土土器より古い型式の土師器が出土しており、西僧房焼失(973年)以前の10世紀前半～中葉の時期にF期を置くことができる。

### 阿弥陀浄土院との関連

次に遺物と遺構との関連から、十三坪内の状況を復原してみよう。

土器は平城宮Ⅱ期(729～749頃)とS D 650 A期(9 C中葉～後半)に属するものが最も多く、長岡宮前後のものがこれに次ぐ。遺構では、A・B期、D期、E期において大型建物を新たに造営しており、遺構の画期が土器の出土量に対応しているであろう。即ち、A・B期とE期とが、十三坪内で最も居住密度の濃い時期であった。

瓦については、本調査区出土軒瓦のうち10型式が法華寺阿弥陀浄土院とで同範関係にあることが注目される。10型式中9型式は、十三坪の西側部分である十二・十三坪境小路とその側溝縁辺から出土しており、坪中心部では出土していない。遺構区分におけるC期には、大型建物の新たな造営はないから、発掘調査地内で使用したとすることはできない。未発掘地の十二坪東半部か、十三坪北半部に瓦葺建物があるのだろう。この未発見の瓦葺建物は、9型式の同範関係をもつことから、阿弥陀浄土院と密接な関係をもつことは容易に推定されよう。10型式中残りの1型式である6713Aは、3次東発掘区で7個体出土しており、他の発掘区では皆無である。6713Aは、阿弥陀浄土院創建軒平瓦6714A型式の系譜を受け継ぐが、文様がかなり退化しており、かつ瓦当側縁をまるくケズルことから年代の新しいものである。年代の下限は、S K 2680から出土したことから、S D 650 Aの時期におくことができ、瓦の示す年代は、8世紀の最終末から9世紀後半代の間置くことができる。この6713A型式の瓦が3次東で検出しE期としたS B 2625に葺かれた可能性も否定できない。しかし7個体という数からみれば、十三坪の北半部分に瓦葺建物があつて、それが流れ込んだ可能性も否定できない。いずれにしても、8世紀の最終末から9世紀後半代において、十三坪が阿弥陀浄土院と密接な関連を有したことは認めてよいように思われる。天平宝字三年(759年)光明皇后によって発願された阿弥陀浄土院の平安時代における状態は不明だが、平城宮80次阿弥陀浄土院の調査ではS D 840、S D 845から平安時代の遺物が出土しており、小範囲の発掘でも9世紀の灰釉陶器・緑釉陶器が出土することが多いことからみれば、9世紀において浄土院の法燈は衰えていないとみてよいであろう。十三坪内におけるD・E期の繁栄ぶりは、こうした阿弥陀浄土院との関連で考えてみる必要があるだろう。